



した言動を学習する授業を設定しました。対象生徒の実態には、本校においては比較的意思疎通ができ、ローマ字入力もしくはフリック入力ができるもの、対人関係において課題のある同じクラスでスマートフォンを所有している生徒を三名選定して授業を行いました。

はじめに練習を兼ねて、日常生活に関する簡単な質問を教師が投げかけ、答えてもらいました。一名の生徒が緊張している様子でした。しばらくして、本題である「目上に対するチャットでの友だち言葉な発言」を問題として提示しました。積極的に否定を表明する生徒、それに対して相づちを打つ生徒と反応に差はありましたが、総じて不適切であることを意思表示することができました。生徒からは「望ましい発言」も発表されました。

続いて、「目上に対するスタンプでの返答」に対しては、最初は無反応で意図がわからない様子でした。そこで、教師側から「相手は目上である」ことを伝えたところ、全員が不適切であると伝えてきました。また、「体調不良の連絡に対して笑顔のスタンプでの返答」に対しても、無反応な様子が見られました。そこで教師が具体的にスタンプの正当性（具合が悪いのに笑っているスタンプを返すこと

が正しいか）を伝えると、一部の生徒が納得する様子が見られました。スタンプで返答する際に正しいものを選択するように促したところ、二名の生徒が望ましいスタンプを選ぶことができました。ただし、一名は悩んでいる様子が見られていましたので、「スタンプではなく、文字で返答する方が望ましい」ということを伝えたと、納得した様子が見られました。

以上のことを踏まえて、「チャットの特徴（記録が残る）」「スタンプや言葉の受け取り方には、人によって差がある」「話すことで意思が伝わりやすい」ことをまとめとして伝えました。

授業を終えて、次のことが課題として見えてきました。一つ目が「文章を使つてのコミュニケーションが少ない」です。通常の会話のような瞬間的な発言ではなく、相手を意識し一歩立ち止まって考えるから発言すること。そして、普段から文章を使うという習慣が適切なコミュニケーションシヨンにつながると思われます。二つ目が「対面でのコミュニケーションの稚拙さ」です。知的障害の特性でもありますが場の雰囲気を感じ取ったり、間違えたことを直したりすることが難しい様子が見られました。語彙力の向上や、発

言の間違いを直すことができる経験の場の確保が必要であると感じました。

後日、定着度を確認するためにオンラインでテストを行ったところ、発言の少なかつた生徒であつても理解度は高く、高得点でした。今回の授業に対して、生徒それぞれが自分に合った形で参加できていたことが得点結果からわかりました。

この情報モラルの実践を踏まえて、生徒が常に適切なコミュニケーションを意識していくために必要なことは以下に挙げられます。

- 「日常的にICT機器を使う場面を設定する」 ツールとしてのICT機器の利用を通じて、意思を伝える。
- 「教師がICT活用を特別視しない」 教師が苦手意識を持たず、普段使っている。
- 「小さな失敗で大きな失敗を防ぐ」 安心・安全な環境を提供した上で、その中の小さな失敗を許容し、修正していく経験を積ませる。
- 「助け合う姿勢の育成」 子ども同士だけでなく、大人も助け合う姿を見せることで助け合うことが当たり前の意識の定着を図る。
- 「誰も取り残さない」 表出しているかどうかに限らず、誰もが理解を内在